平成21年10月23日　桐生タイムス掲載

（昭和21年2月8日第三種郵便物認可）　夕刊 木

右から塚越さん、島田さん、宮地さん、栗田裕校長（桐生高校校長室で）

歴史の空白に光

貴重な校友会雑誌創刊号

桐高に寄贈

群馬県立桐生中学校校友会が1923年12月に発行した「校友会雑誌創刊号」が20日、桐生ガス会長、塚越平人さんから桐生高校同窓会（宮地由高会長）に寄贈された。

「文は人の現れです。猛虎嵎を負うて嘯けば百獣畏る。仙鶴天に沖して叫べば群鶏ひそむ。大きな鐘は大きく響き、小さな鈴は小さく鳴る。文の人に於ける、音響とその響くものとの関係に等しい。文章は人格の響きだからです」。こんな創刊の辞で始まるA5判200㌻の創刊号には、現役の学生や卒業生がさまざまな思いをつづっていて、この中には、草創期の桐生中の行事や学校の授業の様子などが克明に記されている。

49年の卒業生で、地名の研究者として知られる島田一郎さんは、全国の古書資料にくまなく目を通す日常だが、こうした中で、この創刊号の存在に気づき、入手した。それを先輩の塚越さん（39年卒）に託して学校に寄贈してほしいと依頼。塚越さんは、大変貴重なものだからそれにふさわしい形をと、特注の桐箱を用意し、この日、島田さんと共に同校を訪れ、「長く大切にしてください」と宮地さんに手渡した。

64年に火災にあってむかしの資料を焼失してしまった同校で、文献がほとんど存在しないのが開校から昭和初期までの間だ。創刊号が手に入ったことで歴史の空白が埋まると、関係者の期待は大きい。宮地会長は「ありがとうございます。しっかり活用していきます」とお礼を述べ、塚越さんと島田さんには、席上で記念の校章が贈られた。